

衣手に 水茨つくまで 植ゑし田を

引板わが延へ 守れる苦し

(作者未詳 巻八・一六三四)

新緑の美しい5月は、田植えが始まる季節でもあります。田植のうちの一首です。手間ひまをかけて植えた田に侵入者が入らないよう引板(縄を引張ると木の板が打ち鳴らされる鳴子)を張って守っておくことの苦労が歌われています。ですが、実はこの「衣手に 水茨つくまで 植ゑし田」には、苦労して育てた娘の意味が込められている

やまと 万葉がたり

と言われています。そと育てる苦労と娘を育てる苦労、大事に育ててきた稲と大切に守ってきた女性を思うことの共通性から、このよきな発想が生み出されてきたのかもしれない。ところで、私にはこの歌からつい連想して「小須流女」の名が思い浮かびます。その中に、田植をさせた稲の品種として「小須流女」の名が記されています。古代の女性名に「〇〇」という名前が多いこと、「女」字が使われていることから、この稲の名前は女性をイメージしてつけられたようにも思われます。もしかすると、この稲の品種に名前をつけた人は、稲を女性に例える歌と同じような発想を持っていたのかもしれない。(県立万葉文化館主任 研究員・吉原啓) 次回は29日

【訳】衣の袖に水あかが着くまで苦労して植えた田を、侵入者を防ぐ引板をめぐらして守るのは、つらいことです。

石上^{いその}かみ 布留^{ふる}の早稲田^{わさだ}を 秀^ひでずとも

縄^{なは}だに延^はへよ 守^もりつつ居^をらむ

(作者未詳 巻七・一三五三)

私が大学に通うために奈良市内に住むようになってすぐのころ、少し頑張って自転車で天理市布留町の石上神宮まで行ったことがあります。境内で感じた何とも言えない静謐な雰囲気は、今でも忘れられません。

この歌には、石上の布留のあたりに植えた早稲田の穂がまだ出そろっていないことも、せめてしめ縄だけは張っておきなさいとあり、成長しきる前の稲でも大事に囲い込んでおくべきだと歌っています。実はこの歌も、前回(15日掲載)に紹介した巻八・一六三四番歌と同様、稲や稲が植えられた田が女性に例えられている歌だと言われています。まだ穂が出ない早稲田は、まだ年ごろには届かない少女を暗に意味しているとされ、この歌は年

やまと 万葉がたり

若い少女に言い寄る男が少女の親に告げた歌とも、反対に娘の親が娘に言い寄る男に不変の愛を誓わせる歌とも考えられています。早稲田は、手塩にかけた娘や成長が待ち遠しい恋しい少女を想起させるような、早い生育が待ち望まれる存在だったのでしょう。

ところで、歌に「早

稲田」とある通り、古代には「ワセ」と呼ばれた稲の品種がありました。前回も紹介した香芝市の下田東遺跡から出土した平安時代初期の木簡には、「和世種」と呼ばれる稲が旧暦3月6日に田植えされたことをうかがわせ

る記述があり、これが早稲の一種とみられています。こうした稲の品種は、他の例では「種子札」と呼ばれる木簡にも書かれています。

「種子札」は、稲の種子を保管・頒布する際に品種名を書いて付けたもので、これによ

【訳】石上の布留の早稲田は、まだ穂に出ずとも縄だけでも張っておけ。監視していよう。

て古代にもさまざまな種類の稲があったこと、そして品種改良もなされていたことが分かりました。古代の人々は、稲の早い成長を願うばかりでなく、少しでも良い品種を生み出そうと努力していたのです。その情熱はまさに、いと美しい娘や恋しい女性への思いに近いものがあつたのかもしれません。

(県立万葉文化館主任 研究員・吉原啓)

|| 次回は6月12日